

母達の話題

常石貞子

いつも、坊ちゃんのお迎ひにおいでになる、N夫人のお美しい姿が、一週間程みえないと思つたら、今日久し振りでお目にかゝつた。

「さう遊ばしたの」。「えゝ。一寸、兵隊さんのお宿をしたものですから、忙しくて、つひ學校の方をなまけて」。「お笑ひになつた」。「それは、本當に、大變でしたね。私も、二三日前、青山南町の、叔母の家に行きましたら、やはり將校方十人、宿泊して居られましたわ。居合せた私は、配膳をする女中等に手傳つて、これから御出征なさる方々が、今後聲の上で食事をせられる日が幾日あるだらうと、思つて出来るだけ、鄭重におもてなしを致しましたの」。「御苦勞様でしたね」。「N雄さんのお母様がおつしやつた」。「さういへば私、東京驛で、日本赤十字東京支部の、臨時特別救護班

の陰山班長以下看護婦さん達三十名程出發なされたのを偶然おみをくりしましたわ」。「W夫人がおつしやいましたらE夫人が、言葉をついで「私の近所の、警部の方の奥さんで、四人の子供を御主人にあづけて出られたのですよ。一番下の、三つの坊ちゃんが、さうしてもお母様のそばをはなれないので驛まで御主人がつれていらつしやいますが、いざ發車さいふ時、其の坊ちゃんが泣かれたので、お父様が、吐つて居りましたがなんともいへない氣持でした」。「さ、しんみりおつしやつた」。「でも、三つならまだよいのよ。産れて、間もない赤さんを殘して應召せらるゝ方もあるのですつて。お乳がはつて、發熱するのを、注射したり氷でひやしたりして出かけられるのですね」。「もう少し陸軍省が氣を氣かして、志のある人で、責任のない者を、

之に當て、母の位置にある人は、出来るだけ最後まで、母の義務を、果す様にしたらよいでせうにね」N雄さんのお母様がおつしやるこ、皆のお母様方の口から「本當にね」こいふ言葉が發せられた、異口同音に。それから、數日たつた、或る秋雨のふる土曜日でした。我兒を先生にお願ひしてから、暫時千人針を、皆様にお願ひしたくて、玄關にたつてゐました。一針つゞの眞心をいたゞいて、最後に椅子に腰かけられて、お子様のおかへりを待つ、奥様にも、一針お願ひいたしました。「あなたか」はい。私のいここが、麻布三聯隊から、長島部隊に屬してこの四五日中には、出征しますので」こ答へた私は、一針で、すむつもりでしたら幾つも、幾つもとて下さるので、さては寅年でいらつしやつたか、やれ、やれ、お手間ぎらせをして相すまないこ、思ひながらも、澤山やつて、いたゞけるのを喜びながら、布の端をひつばつてゐました。かげ紋のある、お召の着物からうづら縮緬地に、爆彈の刺繡をした半襟を、品よくのぞかした奥様は、きように、手を運ばせながら、色々のお話をなさる。

獸肉の儉約から兎料理は如何等こ、話をしてゐた私共は、急に冬が來た様に、冷氣が身にしみる袷の袖の、寒さに、思はず、襟をかき合せ、北支上海の傷病者はごんに、身にこたへるでせうこ、いつの間にか、從軍看護婦の方々の事が、話題になりました。私は數日前の、皆様のお話を思ひ出して、「現役の看護婦の方々に、まぢつて働く應召看護婦の方々の中には、赤さんを、他人にあづけて、戦地向ふ方も、あるさうですが、志さへあれば他の者が代れるでせうに」こ、私が、つぶやきますこ、奥様は、強く否定なさつて、「それは、こてもためでせう、赤十字の看護婦の方々の活動は、なまやさしいものではありません。それに、團體訓練や赤十字精神教育が、一朝一夕で、出来るものではないませんか。宅では、あの子が八ヶ月兒で生れた時、これでも、育つかこ、醫者も疑問を持つ位でした。ガラス箱の中に入れて育てたのですが、その時たのんだ看護婦さんは、赤十字出の方で實に立派な方でした。きびんな處置をなさる高潔な人格を、持つて居られました。

時々呼吸困難に、おち入る嬰兒を、細かい注意を拂ひ、

適當の溫度を調節して、霜ふる寒夜も、鐵をもさかす炎熱の晝も、統制された處置の許に、約一年間、よくも、つゝいたものだに、誰一人感じないものはありませんでした。

人並に發育してから、私共の手に渡されたのですが、その方の後を、私や、女中等、三人が、りり、なほ充分な事が出来かねましたもの。

私は、今でも、その方の幸福を、合掌して毎日、祈つて居ります。ミ仰せられる奥様の頬には、涙がつたはつて居りました。何さいふ感激にみちたお話でせう。私は、この奥様の、姓も、名も、知らない。坊ちゃんも知らない。けれども、何さいふ幸福なお子様であらう。よし、この坊ちゃんも、他の兒に比して或は、幼年期は、發育がおくれても、かゝる周到な注意の元に育てられたら、どんな立派な體格を、かち得られる事であらう。私は頭をたれた。睨目した。私の頭の中は、白衣の天使の様々な活動が考へられた。戦地勤務の中で、重要な傷病兵を、病院船に、乗船させる看護婦等の一絲亂れぬ作業を。船酔のために、顔色蒼白なる事もあらうに、我が身をかへりみず、嘔吐に惱

まされながら、洗面器を片手に持ち、檢温して、歩く姿を。銃こそ、負はね、軍刀こそ、帯びね、その兩肩には、銃よりも、背囊よりも、重い責任を擔ひ、傷き倒れた勇士達を、母さも、姉さもなりて手篤くみこる白衣の天使よ。おんみは平時は、その犠牲的な赤十字精神もて、如何に多くの人々を救つて居られる事だらう。大和撫子。日本のほこり。

急にあたりがざわついたに、氣がつき目を開けば今しも、保育の時終へて、にこやかな笑をたゝへた先生方が各家庭の母の手に幼兒を引渡さうとせられてゐた。